

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第16回
 第5章 古田足日先生
 その2 「散文性のかく得」(上)

ことし(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年にあたる。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

「さよなら未明」(続)

私が『現代児童文学論』(くろしお出版1959年)を開いて、古田先生にここがわかりませんといったのは、10~11ページの見開き、巻頭の「さよなら未明—日本近代童話の本質—」の第2節のはじめである。少し長くなるが、引用する。

未明童話のことばは、ぼくたちがふつう使う日常のことばとは異質のことばである。

人魚は、南の方の海にばかりすんでいるわけではありません。北の海にもすんでいたのです。／北方の海の色は、青うごぎいました。あるとき、岩の上に、女の人魚があがって、あたりの景色をながめながら休んでいました。／雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見てもかぎりない、ものすごい波が、うねうねと動いているのです。

(ママ)

「赤いろうそくと人魚」の書き出しだが、この文章のなかのもっとも重要な語句は「北方の海」である。この北方の海はぼくたちの日常のなかで使われる「北方の海」ではない。ぼくたちは地理的な意味で「北方」ということばを使うが、この文章のなかの「北方」はその一般的な用法のなかの一属性——暗くさびしく孤独という属性を強調し、それを強調することによって、暗くさびしく孤独な環境一般を象徴しているのである。ここでは「北方」は「海」を限定することばではない。逆に、その日常的な意味を離れて、無限定な広がりを見せている。そして、海も波も人魚に対して敵意を持つもののように書かれているのである。

ここは、未明童話のテキストに即して論じたところで、私は、ある種の生々しさを感じて引きつけられた。同時に、古田先生の「日常のことば」とか「一般的な用法のなかの一属性」という言いかたをうまく受け取れずに、はね返されるような気もしたのである。でも、ここが、どうしてもわかりたかった。「一般的な用法のなかの一属性」といったことばを何とか自分のことばに置き換えられれば、腑に落ちるのではないかと思ったりした。「さよなら未明」のこの一節をときどき思い出しては考えることが、しばらくつづいた。

言語学への接近

前回も書いたことだけれど、大学の文学部に入学して何をやるか、私のなかに、いくつか候補があったが、児童文学は候補ではなかった。それでは、何が選択肢だったのか。一つは、ことばそのものの勉強をすることだった。

私は、立教大学文学部日本文学科で勉強した。担当の宇野義方先生にお願いして、本来なら3年生から履修する「国語学演習」に2年生からくわえてもらって、4年生までつづけた。いまは「日本語学」というけれど、当時は「国語学」だった。

大学の外でも、東京言語研究所の理論言語学講座を受講したり、三上文法研究会（『象は鼻が長い』くろしお出版 1960年などで日本語における「主語」という考えかたの廃止を主張した、在野の文法学者三上章の研究会）に参加したりして、言語学に接近した時期があった。ところが、結局、独自の研究課題を見出すことができず、言語学、日本語学を専攻することは断念した。しかし、そのころ熱心に読み、その後も折々に読んだ言語学の本のなかに、「さよなら未明」を解くヒントがあった。

1988（昭和63）年、有精堂から刊行された『講座昭和文学史』の第3巻『抑圧と解放（戦中から戦後へ）』に寄稿した「〈子ども〉の再発見」という論考（注1）で、「さよなら未明」をふくむ1950年代の「童話伝統批判」のを中心にして書いた。ここではまだ、「さよなら未明」の先の箇所への解読までには踏み込めなかった。

この「〈子ども〉の再発見」なども取り込んでまとめた著書『現代児童文学の語るもの』（NHKブックス 1996年）のなかで、「一九五九年の古田足日の文章（「さよなら未明」一宮川注）は、わかりにくい。私なりに解釈してみる。」とことわって、ようやく、つぎのように書いた。

古田足日のいう、ことばの〈一般的な用法〉とはデノテーションにあたり、〈一般的な用法のなかの一属性〉はコノテーションにあたるのではないか。「北方」なら、〈地理的な意味〉がデノテーション、〈暗くさびしく孤独〉というのがコノテーションということになる。古田は、未明童話のことばがデノテーションではなく、コノテーションが強調されたものであることを批判しているのだ。たしかに、「赤い蠟燭と人魚」の〈雲間からもれた月の光がさびしく、波の上を照らしていました。どちらを見てもかぎりない、ものすごい波がうねうねと動いているのであります。〉というくだりにしても、〈月の光がさびしく〉というけれども、どんなふうにさびしいのか、どんなふうに、波が〈ものすごい〉のかはよくわからない。そうした説明以前に、〈さびしく〉、〈ものすごい〉という気分が語られてしまうのである。（「赤い蠟燭と人魚」の引用は「さよなら未明」にしたがっている）

デノテーション、コノテーションというのは言語学の用語で、デノテーションは「外示」（あるいは「明示」）、コノテーションは「共示」（あるいは「伴示」）と訳される。著書では、丸山圭三郎の簡潔な説明を参照している（丸山「コノテーション／デノテーション」、今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社現代新書 1988年所収）。丸山は、デノテーションを「特定共時文化内において認められ、辞書に登録されている語の最大公約数的な意味」とし、それに対して、コノテーションは、「語が喚起する個人的・情感的・状況的含意をさす。」としている。（注2）

30年近く前に刊行した著書を読み直し、一部を書き写しているけれども、「一九五九年の古田足日の文章は、わかりにくい。」と先生に毒づいた割には、1996年の私の解釈も読みにくい。いまでは、このことを語るときに、コノテーションといった用語は持ち出さずに、「ことばの含意」とか「意味の含み」などということにし

ている。

「文学論」としての疑問

著書では、前節に引いた部分につづいて、こう書いている。

文学作品のことばは、何らかのかたちでコノテーションに依拠しているものだが、古田は、あえて、それを批判している。それは、どうしてか。デノテーションを強調することをおしすすめていけば、たとえば、薬の使用説明書のような、まったく含みのない表現になる（もし、薬の使用説明書がコノテーションに依拠した詩的な表現で書かれていたら、命にかかわる）。それは、文学とはかけはなれたものだろう。（カッコ内原文）

「さよなら未明」は、「文学論」としては疑問をもたざるをえないものだと思う。小川未明が「赤い蠟燭と人魚」でコノテーション（「一般的な用法のなかの一属性」）を強調したとしても、それは、「文学」のことばなのだから、当然の書きかたで、責められるものではないはずだ。1959年の古田足日は、どうして、そうした「文学論」を述べなければならなかったのか。

戦争と敗戦を経験したのちの日本の児童文学は、子どもたちにむけて、「戦争」も戦争を引き起こす「社会」も書かなければならなかった。1950年代の「童話伝統批判」の動きにくわわったのは、大正末ないし昭和一けたに生まれた、当時の若い児童文学者たちである。

彼らは、「十五年戦争」のなかで育ち、天皇を中心として歴史は流れていると教えられた世代だ。敗戦とともに、内なる価値体系の崩壊を経験し、やがて、子どもの文学に志した彼らが、そのテーマとして、まず、意識したのは「戦争」だったと思う。（注3）

実際、「童話伝統批判」をへて、1960年前後に「現代児童文学」が成立したあとには、おびただしい数の「戦争児童文学」が書かれることになる。しかし、「童話伝統批判」のなかで「戦争」を書くことがとりたてて語られることはなかった。それは、自明のことだったのかもしれない。

古田足日は、デノテーションによって書いていくことが必要だと考えたのだろう。古田は、「事象—環境との相互作用によって成長していく人間像」を描くべきだと説いたが（「近代童話の崩壊」『小さい仲間』1954年9月）、そうした人間像を描くためには、小川未明に代表される童話のことばがコノテーションのほうにアクセントがあったものを、デノテーションにアクセントをつけかえなければならなかった。古田は、「散文性の獲得」を主張しなければならなかったのである。「散文性は、日常語を使用する近代文学の方法のこと」だという（「散文性のかく得」『小さい仲間』1954年7月）。

古田足日が「さよなら未明」で「赤い蠟燭と人魚」を論じた装置は、もしかしたら、素朴で、ありあわせの道具だったのかもしれない。それでも、論じたいモチーフは明瞭だった。それは、古田が「呪術・呪文」とした未明の詩的で象徴的なテキストを撃つことによって、児童文学の散文性を何とか手に入れたいという願いだった。（つづく）

(注)

- 1、宮川健郎『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍 1993 年）に再録している。
- 2、沼田知自は、丸山圭三郎が、私が引用した部分のすぐあとで、デノテーションとコノテーションを「対立概念」としたことへの疑問を述べた上で、「さよなら未明」の再々解釈を試みている（沼田「古田足日「さよなら未明」における言語観の再検討—ソシュールの言語観との比較を通じて—」『児童文学研究』第 54 号、2021 年） デノテーション、コノテーションについて、くわしくは、私の著書で引用した滝田文彦「言語と文学」（滝田編『言語・人間・文化』NHK 市民大学叢書 1975 年所収）や、ロラン・バルト「記号学の原理」（沢田昂一他訳『零度のエクリチュール』みすず書房 1971 年所収）などを参照のこと。
- 3、古田足日「実感的道德教育論」（『人間の科学』1964 年 3 月）などを参照のこと。

(付記) 引用した以外にも、宮川健郎『現代児童文学の語るもの』（前掲）の第 3 章「児童文学革新の時代——「子ども」のほうへ」と重複する部分があることをおことわりします。